

キー・ラーニング・コミュニティのカリキュラム開発に関する研究

柴山 陽祐

(愛知教育大学大学院 教育学研究科)

A Study of Curriculum Development at Key Learning Community

Yosuke SHIBAYAMA

(Graduate Student, Aichi University of Education)

I はじめに

キー・ラーニング・コミュニティとは、アメリカ合衆国のインディアナ州インディアナポリスにある公立学校(IPS)である。1987年に公立学校の教師らによって、その母体となる、幼稚園からエレメンタリースクール第6学年までの一貫学校(K-6)が設立された。その6年後の1993年には、ミドルスクール(第6学年から第9学年)が設置された。このミドルスクール設置時に、初等学校の第6学年がミドルスクールに移管され、エレメンタリースクールは幼稚園から第5学年となった。1999年にはハイスクール(第10学年から第12学年)が同じ敷地内に増設された。こうして、キー・ラーニング・コミュニティは、幼稚園からハイスクール第12学年(K-12)までを一貫した地域の公立学校としてインディアナ州の経済的な支援を基に設立され、今日まで運営されている。

キー・ラーニング・コミュニティと他の公立学校との大きな相違点は、多重知能理論を代表とした、複数の革新的な教育・心理学理論を構成原理として応用したカリキュラムを開発し、授業実践を行っていることである。その独自のカリキュラムと授業実践は、インディアナ州だけでなくアメリカ中の教育関係者の関心を集めている。

本稿の目的は、このキー・ラーニング・コミュニティのカリキュラム開発の過程を明らかにすることである。そこでまず、ハワード・ガードナー(Howard Gardner)によって提唱され、アメリカを中心にヨーロッパやアジア諸国の研究者、学校現場から注目されている多重知能理論の特質について述べる。次に、キー・ラーニング・コミュニティが設立された背景、つまり創設当時のアメリカにおける教育改革に言及

した上で、この学校の設立までの経緯について述べる。そして、この学校のカリキュラムの構成原理とその特徴的な授業実践に焦点を合わせ考察する。

II 多重知能理論とその特質

1 8種類の知能

多重知能(Multiple Intelligences)理論とは、アメリカ合衆国の認知心理学者ハワード・ガードナーによって、1983年の著書『心の構造』(*Flames of Mind*)の中で提唱された知能の新しい考え方である。ガードナーは、これまでの伝統的な知能の考え方や尺度を、人間の知能の一側面しか描き出すことができないものと批判し、従来の知能検査の枠を越えた新たな知能のとらえ方を提案した。ガードナーは、人間の知能を「情報を処理する生物心理学的な潜在能力であって、ある文化で価値のある問題を解決したり成果を創造したりするような、文化的な場面で活性化されることができるもの」¹⁾と定義した上で、人間のもつ知能を多面的・複合的にとらえ、知能には8種類のプロフィールがあることを証明した。まず、以下にガードナーが定義した多重知能理論における8種類の知能を示す。²⁾

- ① 言語的知能 (Linguistic Intelligence)
- ② 論理数学的知能 (Logical-Mathematical Intelligence)
- ③ 音楽的知能 (Musical Intelligence)
- ④ 身体運動的知能 (Bodily-Kinesthetic Intelligence)
- ⑤ 空間的知能 (Spatial Intelligence)
- ⑥ 対人的知能 (Interpersonal Intelligence)
- ⑦ 内省的知能 (Intrapersonal Intelligence)
- ⑧ 博物的知能 (Naturalist Intelligence)

2 多重知能理論の特質

特別支援教育の専門家であり、多重知能理論を学校教育に応用する試みを行ってきたアメリカの心理学者トーマス・アームストロング(Thomas Armstrong)は、著書『マルチ能力が育む子どもの生きる力』³⁾の中で、多重知能理論に基づいて教育活動を行う際に重要となる考え方として以下の3点を挙げている。

- (1) 多重知能は、経験的事実に基づいた理論であって、すべての人には8つの知能が存在する。もちろん、それらの知能は一人ひとりの中に独自の形で機能しており、なかには、詩人であると同時に、政治的手腕も兼ね備え、さらに科学者、思想家、自然愛好家でもあったドイツ人のゲーテのように、8つの知能すべてが極めて高いレベルで働いているという人もいる。一方で、重い障害などで、すべてが極めて低いレベルで機能している人もいる。しかし、ほとんどの人は、8つの知能のうち、いくつかは秀でており、いくつかは少し低く、残りはほどほどといった具合に働いているといつてよい。
- (2) 8つの知能に関して力強い励ましや適切な指導を受けることによって、多くの人は8つの知能すべてをかなりのレベルにまで高めることができる。ガードナーは、『鈴木メソッド』を例に挙げ、ごく平均的な音楽の才能しかなかった子どもが、恵まれた環境(親の協力や、幼児期から音楽を耳にすること、早期の音楽教育など)によって、バイオリンやピアノの腕前をかなり上げることができたことを指摘している。このようなケースは、音楽的知能に限らず、他の知能でも見ることができる。
- (3) 8つの知能は、我々の生活の中で、絶えず相互に影響し合っていており、どれひとつをとってもその能力だけでは存在しない。たとえば料理を作る時、レシピを読んだり(言語的知能)、人数に合わせて量を分配したり(論理・数学的知能)、家族全員を満足させる献立を考えたり(対人的知能)、自分自身の食欲を

コントロールしたり(内省的知能)、食材にこだわったり(博物的知能)、包丁や道具を器用に扱ったり(身体・運動的知能)する。つまり、8つの知能は通常複合的に機能しているのである。

上述したとおり、多重知能理論の知能の考え方は、それ以外の知能の考え方とは大きな違いがあることは明らかである。一般的な知能テストや学力テストが、主に言語的知能や論理・数学的知能を測定・評価の対象としている一方で、多重知能理論は、音楽的な感性や身体的な技能にまで知能の範疇を広げ、それらに対し言語的知能や論理・数学的知能と同等に価値を与えている。このような知能観は、言語的・数学的な要素を中心とした教育活動に対し、新たな展開の可能性を示唆し、学校における教育活動をより充実させることができるだろう。そうした多重知能理論の可能性を公立学校で実証したのが、本稿の中心として取り扱うキー・ラーニング・コミュニティである。

III キー・ラーニング・コミュニティの設立とその背景

1 設立当時のアメリカの教育改革

キー・ラーニング・コミュニティの創業者兼初代校長であるパトリシア・ボラーノス(Patricia Bolanos)を代表とした、インディアナポリスの公立学校に勤務する8人の教師が、多重知能理論に基づいた最初の公立学校を設立すること、すなわち多重知能理論に基づいて、カリキュラムや授業実践、評価等を構想することを決意した背景には、1980年代後半以降のアメリカの教育政策と、そこから派生した当時のアメリカにおける教育的課題があった⁴⁾。

当時のアメリカの教育改革とは、子どもの学力低下問題を克服することを目的とした、アメリカ連邦主導による各州の標準テスト(standard tests)政策やナショナル・カリキュラム(国家教育課程)設定への動きであった。結局、アメリカにおいてナショナル・カリキュラムは設定されなかったが、学校での学習や評価が標準テストで好成績を残すことを主要な目的としたものに変容してしまったのである。以下、そのような教育改革の動向をもう少し詳細に述べる。

1983年、「アメリカの教育に関する全米委員会(National Commission on Excellence in Education)」が発表した連邦報告書『危機に立つ国家』(A Nation at Risk)の中で、「アメリカの学生・生徒は、学力テストのうち19種類で、第1位または第2位が取れなかったし、他の工業化諸国と比べて実に7回も最下位になっている」⁶⁾ことや、「アメリカの成人のうち約2300万人は、読み、書き、理解に関する最も簡単なテストにおいてさえ、機能的に文盲である」⁶⁾ことなどが指摘され、それらがアメリカ教育の危機的な状況として報告された。こうした報告を受け、その後、1980年代後半から1990年代のアメリカでは、子どもの学力低下を克服することが重要な教育的課題となっていたのである。

こうした低学力問題を克服するという目標の下で、アメリカ政府は、全国の子どもたちの学力を調査するために、各州に各教科のスタンダードを設定し、それに基づいた標準テストを作成・実施することを命じた。こうした標準テストを実施する動向は、「2000年の時点で、48にも及ぶ州が児童・生徒の学力を測定・評価する何らかの州テストを導入」⁷⁾するまでに至り、その結果、アメリカの学校では、標準テストの成績を上げることが学校教育の主要目的となり、標準テストの成績を通して子どもを評価するようになってしまった。こういった1980年代後半以降のアメリカの教育政策は、「結果至上主義的な教育管理政策の実態を示す象徴的な出来事」⁸⁾と称され、それらは、「テスト結果に基づく数値のアップ・ダウンに学校、教員、親などの目を釘付けにする」⁹⁾結果となったのである。

2 キー・ラーニング・コミュニティ設立の経緯

上述したような、1980年代後半以降のアメリカにおける教育改革を危惧したのが、ボラーノスを代表とした8人の創設者たちであった。彼女たちは、標準テストで好成績をとることを目的とした学習(「ドリル学習など機械的で退屈な学習」¹⁰⁾)では、子どもの創造性やリーダーシップを育成することができないと考えた。また、多重知能理論の提唱者でキー・ラーニング・コミュニティ創設に協力したガードナーも、「標準テストは、生徒たちの学習の成果を一部分しか映し出すことができない」¹¹⁾と批判し、標準テ

ストでは評価できない子どもたちの知能のプロファイルの育成が軽視されることを憂慮していた。こうした共通認識をもつ両者の出会いがキー・ラーニング・コミュニティ設立の契機となり、ボラーノスたちは、標準テストの成績向上を目的としない形のカリキュラム・学習・評価の方法を模索し、多重知能理論に基づいた教育活動を計画・実行することを決めたのである。以下、キー・ラーニング・コミュニティ創設当初の取り組みについて述べる。

1983年、『危機に立つ国家』が出版された年、彼女たちは、何らかの行動を起こそうと決意した。¹²⁾この1983年の報告書がまさに、彼女たちにキー・ラーニング・コミュニティのプロジェクトを着手させる画期的な出来事となった。そして、彼女たちが目指したのは、生徒たちをより良い本物の方法で教え、評価を与える方法であった。では、8人の教師たちは新しい学校づくりをどのような方法で進めていったのだろうか。

新しい学校づくりを決意してから、彼女たちは、教育哲学者のジョン・デューイ(John Dewey)をはじめ、論理学者のエリオット・エイズナー(Elliott Eisner)やジェイムス・B・マクドナルド(James B. Macdonald)に至るまで、広い範囲の文献調査を行い、そうした過程の中で、ガードナーの『心の構造』に出会った。しかし、当時の教師たち(後のキー・ラーニング・コミュニティの創設者たち)は、多重知能理論を教育に応用することができるのかどうか、疑問に思っていた。

そこで、彼女たちは、1983年の10月末にペンシルベニア州クッツタウンで行われたガードナーの講演を聞いた後に、ガードナーに直接、この理論についての質問を行ったのである。彼女たちによるこの質問は、後の多重知能理論の教育現場での実践に大きな影響を与えたといっても過言ではない。なぜなら、この時、ガードナー自身も「この理論に関して、教育者は聴衆として意図していなかった。しかし、その時、多重知能理論をカリキュラムの基礎として用い、学校をデザインするという考え方に興味をそそられたことを認めた」¹³⁾と述べており、多重知能理論の教育的実践に関する模索がここから始まったといえるからである。

ガードナーとの長時間にわたる議論は、彼女たち

に、多重知能理論に基づいて学校づくりをすることに意欲を燃やさせた。その後、彼女たちは、インディアナ州の教育の最高責任者に新しい学校づくりへの協力・許可を取り付けたり(キー・ラーニング・コミュニティの運営費の多くは、現在もインディアナ州の支援による)、ハーバード大学教育学大学院のプロジェクト・ゼロの研究者や、インディアナ州立大学、シカゴ大学の研究者とも面会を行ったり、教育の領域で興味深い実践を行っているという評判の高いピッツバーグの公立諸学校や、私立のカロライナ・フレンズ・スクールのような教育先進校へ調査に赴いたりもした。

こうした、数々の研究と、多くの先進校への調査訪問を経た結果、8人の教師たちは、1987年に150人の生徒を迎え、K-6(幼稚園から第6学年までの一貫校)の門戸を開いたのである。その際、彼女たちは、このK-6の公立学校に「キー・スクール」(Key School)という独自の名称をつけ、この学校を多重知能理論に基づいて運営していくことや、それぞれの多重知能を同等に重視していくことを決意したのである。また、彼女たちは、ガードナーの理論を、学校教育の現状に適用することによって、すべての生徒が自分の長所を理解することができるような、ゆたかな土壌を築くことができることを確信していた。こうして、2000年には、多重知能理論を基盤として一貫した教育活動を行う、幼稚園から第12学年(K-12)までのキー・ラーニング・コミュニティが誕生したのであった。

IV カリキュラムの構成原理と独創的な授業実践

1 多重知能理論を基軸としたカリキュラムの構成

ここでは、創設当初から、インディアナ州だけでなく、アメリカの教育関係者から広く注目を集めてきた、キー・ラーニング・コミュニティにおけるカリキュラムの構成原理と実践について考察する。

キー・ラーニング・コミュニティは、複数の教育に関する理論を体系的・理論的に組み合わせることによってカリキュラムを構成し、授業実践を行っている。その中でもやはり核となる理論は、本稿で中心的に扱っているハワード・ガードナーの多重知能理論である。もちろん、多重知能理論だけで、すべてのカリキュラムを構成することは困難であるため、

それに加えて、ミハイ・チクスセントミハイ(Mihaly Csikszentmihalyi)の「内在的なやる気(Intrinsic Motivation)理論」や「フロー(Flow)理論」、アーネスト・ボイヤー(Ernest Boyer)の「人間の共通点(Human Commonalities)理論」、デイビッド・H・フェルドマン(David H. Feldman)の「発達の連続体(Developmental Continuum)理論」、そして、ピーター・センジ(Peter Senge)の「学習の組織(Learning Organization)理論」が応用されているのである。

それでは、その中心となる多重知能理論はどのようにカリキュラムや授業実践の中に応用されているのだろうか。その問いに対する解答の手がかりとなるのが、キー・ラーニング・コミュニティの「週間スケジュール(時間割表)」だといえよう。キー・ラーニング・コミュニティ・ミドルスクールの週間スケジュールの詳細については、資料1に示している。アンテオケ大学シアトル校の教育学教授のリンダ・キャンベル(Linda Campbell)は、この時間割表に沿って学習を行う生徒が、すべての教科に同等の価値があることを理解していると述べている。¹⁴⁾

この資料からも明らかのように、キー・ラーニング・コミュニティのミドルスクール(第6学年から第9学年)におけるスケジュールにおいては、言語学、ドイツ語、数学、音楽、体育、芸術、地理学/歴史、科学の各教科の時間が、それぞれ週5時間ずつ(35×5=175分)設定されている。MI理論では、ひとつの教科の学習において、諸知能は複合的に用いられるとされているが、仮に、各教科でそれぞれひとつの代表的な知能が主として用いられる(たとえば、音楽の授業では音楽的知能が主として用いられる)とすると、日本の中学校の授業時数と比べて、言語的知能と内省的知能・対人的知能以外の諸知能が、バランスよく、対等に設定されていることが読み取れる。¹⁵⁾つまり、「このように各教科を同等に扱っていることが、個々の知能の形態(form)が、他のすべての知能の形態と同様に重要であるというキー・スクールの考え方を明らかにしている」¹⁶⁾といえる。

なお、この分析では、各教科の学習において、それぞれ中心的に活用される知能を以下のように設定した。言語学とドイツ語は言語的知能、数学は論理・数学的知能、音楽は音楽的知能、体育は身体・運動感覚的知能、地理学/歴史と芸術は空間的知能、科

学は博物的知能である。この時間割表を見る上で、特に注目すべきは、音楽的知能や身体・運動感覚的知能と対応する教科の時間数が他の教科の時間数と

同じであるということであり、現行の日本の授業時数と比較しても、一つひとつの知能を対等に育てようとする試みが見て取れる。¹⁷⁾

資料1 キー・ラーニング・コミュニティの週間スケジュール

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
8:30	早く到着した子どもの朝食	早く到着した子どもの朝食	早く到着した子どもの朝食	早く到着した子どもの朝食	早く到着した子どもの朝食
8:55	報告	報告	報告	報告	報告
9:20	体育	男子：体育 女子：科学	女子：体育 男子：科学	男子：体育 女子：科学	女子：体育 男子：科学
9:55	科学	男子：体育 女子：科学	女子：体育 男子：科学	男子：体育 女子：科学	女子：体育 男子：科学
10:30	言語学	言語学	音楽	言語学	音楽
11:05	音楽	言語学	音楽	言語学	音楽
11:40	昼食 発表	昼食 <u>ポッドキャスト</u>	昼食 <u>ポッドキャスト</u>	昼食 <u>ポッドキャスト</u>	昼食 <u>ポッドキャスト</u>
13:10	芸術	男子：数学 女子：芸術	女子：数学 男子：芸術	男子：数学 女子：芸術	女子：数学 男子：芸術
13:45	数学	男子：数学 女子：芸術	女子：数学 男子：芸術	男子：数学 女子：芸術	女子：数学 男子：芸術
14:20	地理学 ／歴史	地理学 ／歴史	ドイツ語	地理学 ／歴史	ドイツ語
14:55	ドイツ語	地理学 ／歴史	ドイツ語	地理学 ／歴史	ドイツ語
15:30	掃除 下校	掃除 下校	掃除 下校	掃除 下校	掃除 下校

—Reproduced with permission of Key Learning Community

ただし、この時間割表に関する考察の中でいくつかの疑問が生じた。1点目は、内省的知能と対人的知能がどのように時間割の中に反映されているかが明らかでないため、8種類の多重知能が完全に同等に扱われている証明にはならないという

ことである。これら2つの知能が各教科の中で活用されるとするならば、どのような場面で、どのように働くかを明らかにする必要があるだろう。それに関連して、2点目は、ひとつの授業の中で、複数の多重知能が複合的に活用される方法や、そ

ういった子どもの様子を見取る方法が明らかでないため、それぞれの多重知能が等しく活用されているかどうかを厳密に判断・評価できないことである。いくら各教科の授業時数が対等に設定されていても、その中で、バランスよく多重知能が活用されていないならば、形式的に授業時数を設定しているだけであるという批判は免れられない。今後、キー・ラーニング・コミュニティのより具体的なカリキュラムと授業実践を分析し考察する必要があると思われる。

2 カリキュラムの構成原理としての他の理論

上述したように、キー・ラーニング・コミュニティのカリキュラムや授業実践は、多重知能理論を軸として構想されている。そこで、ここでは、5つ挙げられている理論の中から、キー・ラーニング・コミュニティの授業実践の中で特に注目を集めている、アメリカの心理学者チクスセントミハイの「内在的なやる気理論」と「フロー理論」を取り上げ、多重知能理論以外の諸理論が、どのようにカリキュラムや授業実践の中に応用されているかについて具体的に述べていきたい。多重知能理論を含む5つの理論の詳細とそれらを具体化した実践については、資料2に図式化して示してある。¹⁸⁾

「内在的なやる気理論」が打ち出す教育的な項目は、「① 子どもが明確な目標をもつこと、② 子どもが自身の技能に応じた挑戦をすること、③ 教師から素早いフィードバックが与えられること、④ 周囲から妨害される心配をせず、活動に集中すること、⑤ 活動の時間制限を設けないこと」¹⁹⁾の5つである。この5つの項目の内容を満たすことで、子どもの内在的なやる気は発揮されるのだ。そこで、キー・ラーニング・コミュニティでは、この5つの項目を重視する形で、「協力的な環境」と銘打ち、理論を実践化している。その「教育的な環境」という名のカリキュラムには、「①複数年齢(multi-age)・複数能力(multi-ability)集団、②高度な関心分野に開発されたプロジェクト、③『ポッド(Pods)』クラスのために提供された選択肢、④フロー活動ルーム、⑤生徒と職員が長所に焦点を当てる機会」²⁰⁾の5種類がある。ここでは文献

調査だけでなく、筆者が2010年9月8日に行った学校参観から、その授業実践の実態を明らかにすることのできた「① 複数年齢・複数能力集団」と「③ 『ポッド』クラス」に焦点を当てて述べることにする。

「複数年齢・複数能力集団」とは、ひとつの学級や授業の中に、様々な年齢や能力の子どもを在籍させている環境を指す。キー・ラーニング・コミュニティでは、2～3ヶ月に1度、学校標準のテストが行われ、その結果に応じて異年齢・異能力学級が組織される。こうした実践の理論的背景には、子どもの内在的なやる気を発揮させるために、子ども一人ひとりに自分にふさわしい「明確な目標」設定をさせることや、一人ひとりの「技能レベルに応じた挑戦」をさせることがある。子どもたちは、その集団の中で、困難を感じることなく自分の能力に合った授業を受けることができたり、自分の能力を高めるためのふさわしい挑戦をしたりすることができるのだ。こうした教室・授業環境を作り出すことにより、集団の中でより能力の高い者はリーダーシップをとる訓練を積むことができ、一方、能力の低い者は、能力の高い者から支援や指導を受けることができる。また、能力の高い者が学習者としてのよい見本(よい学びのモデル)ともなり得る。つまり、能力の低い者はそれを見たり真似たりして、学び方を習得することもできるのだ。そのような環境こそ、「協力的(協同的)な環境」ということができるだろう。

「ポッド」クラスとは、幼稚園から第8学年までの約10年間、キー・ラーニング・コミュニティに在籍する多くの子どもが参加している学習活動である(ミドルスクールについては、資料1の下線部参照)。「ポッド(pods)」は、「えんどう豆のさや」という意味をもち、大勢の子どもがひとつのさやの中で学ぶというイメージから名付けられたものだ。その活動内容は、各校種(エレメンタリースクールとミドルスクール)の最低学年から最高学年の子どもが、学年混合の10～20の小グループに分かれ、それぞれのグループの学習テーマに従って、年間を通した探究活動を行うというものである。

以下に、エレメンタリースクールを例に挙げて、ポッドクラスの詳細を述べる。筆者がこの学校を

参観した時、昼食を終えた子どもたちは、まず体育館に集合し、学年の垣根を越えた約 20 のグループに分かれた。ひとつのグループに 10～25 人の子どもが所属し、1 グループに対し 1～2 人の教師が割り当てられる。子どもの年齢は、約 5 歳～約 11 歳までととても幅広く、おおむね各年齢の子どもが、すべてのグループに均等に分かれている。子どもが揃ったグループから、体育館から各教室に移動し、それぞれの学習を行う。ポッドの活動内容は、体を使った音遊び、学校新聞作り、ファッション、楽器の演奏と歌唱、コンピュータ、合唱、芸術、キャリア教育、フィットネス、詩、裁縫、歴史、演劇、インディアナポリスのツアーガイド、惑星、パペット、科学等、様々な分野・領域から構成されており、子どもたちは、自分の興味・関心に合った活動や自分の長所を活かすことのできる活動を選び、1 年間通してポッドの中で学習を行っている。

たとえば、「体を使った音遊び」のポッドクラスでは、代表の子ども 2 名が教室の前に立ち、自分の考えた体を使った音遊びを実演し(「0」の口をして、手で叩いて音を出すなど)、それを見たり聴いたりした他の子どもが、試行錯誤をしながら同じ音を出すという活動が行われていた。2 名の教師が、全体を見渡ししながら適宜アドバイスをしたり、うまくできた上級生が、下級生に身振り手振りをういながら指導したりしている様子を見ることもできた。

「学校新聞作り」のクラスでは、約 10 名の子どもが、「All about me」というテーマで、それぞれ自分に関する記事を書いていた。子どもの書いた記事は、コンピュータで編集され、週間新聞として発行されている。また、「楽器の演奏と歌唱」のクラスでは、ひとりの担当教員を 10 名ほどの子どもが取り囲み、楽器の演奏と歌唱の活動が行われていた。教師や子どもが演奏する楽器は、ウクレレ、コントラバス、ギター、カウベル、ドラム等様々で、思い思いの方法で試行錯誤しながら演奏を行っていた。

V おわりに

ここまで、キー・ラーニング・コミュニティにお

けるカリキュラムの開発過程について論じてきたが、その基本理念について若干、言及する。そもそも多重知能理論を基軸としてカリキュラムを開発するということは、8 種類の多重知能を中心に据えてカリキュラムの構成と授業実践が行われていることを意味している。そのため、一般的な学校における教科内容を重視したカリキュラムとは異なり、子どもたちの多重知能を発達させることを前提としたカリキュラムとなっている。その中では、教育内容と教材は共に、活用され得る 8 種類の多重知能に基づいて設定され、多重知能を発達させることが主要な目的となる。それゆえ、キー・ラーニング・コミュニティは、その基本理念として、(1)8 種類の知能を同等に扱い、それらを発達・成長させること、そして、(2)育成した子どもたちの長所や才能が社会で活用され、社会全体が発展することの 2 点を最終的な目標として掲げているのである。

そして、この基本理念は、(1)8 種類の多重知能を同等に尊重して育てようという意図から各教科の授業時数を等しくした時間割も編成されていること、また、(2)子どもたちの多重知能を中心に据えて開発されたカリキュラムの中に、一人ひとりの興味関心(長所となる多重知能)に即して探究活動を行う「ポッド」クラスのような時間が置かれたり、多重知能の発達に合わせて指導を行うという主旨で、「複数年齢・複数能力集団」による活動が組織されたりしていることに具現化されていた。こうした時間割編成や「ポッド」クラス、「複数年齢・複数能力集団」こそ、キー・ラーニング・コミュニティの独創的な教育実践だといえる。

最後に、本稿の考察で明らかになったキー・ラーニング・コミュニティにおけるカリキュラム開発の現代的な意義として以下の 4 点を挙げ、結びにする。さらに、今後の研究の展望について述べる。

1 点目は、世界で初めて多重知能理論を学校教育に適用して、カリキュラムや授業実践の開発を行ったことである。この点において、キー・ラーニング・コミュニティの功績は大きい。現在、世界各国の学校で多重知能理論を用いた教育活動が行われているが、キー・ラーニング・コミュニティは、それらの学校のモデルとなり、多くの提案を行っ

てきた。

2点目は、各教科での指導を通して、8種類の多重知能を同等に育てようと努めていることである。時間割に関して前述した疑問点はあるものの、国語や社会、数学、理科、外国語といった教科に対して、音楽や美術、保健体育といった教科の授業時数を同等に扱っている点は、子ども一人ひとりの個性や長所を活かした教育活動のあり方を模索する上で、さらには、芸術教科等のカリキュラム全体における位置づけを議論する上で、今後の日本の教育改革、教育実践の参考となり得るであろう。

3点目は、多重知能理論だけでなく、他の教育・心理学理論を組み合わせることで授業実践を行っていることである。これは、多重知能理論だけでは学校教育のカリキュラムを構成することができないことの暗示ともとれるが、他の理論を組み合わせることで、多重知能理論の課題を明示しつつ、それらを補うことができることの証明にもなっている。キー・ラーニング・コミュニティの教育活動を参考にすることは、多重知能理論だけではなく、その他の理論も併せて研究し活用することで、より効果を発揮することができると思われる。

4点目は、キー・ラーニング・コミュニティという学校そのものと、そこでのカリキュラム開発や授業実践が、現場の教師たちによって創られたものであるということである。トップダウン型ではなくボトムアップ型の教育改革は、日本の学校現場を活性化する方法として参考にすることもできるだろう。

今後の研究では、キー・ラーニング・コミュニティだけでなく、多重知能理論を活用した他の学校も研究の対象として分析・考察し、多重知能に基づいた学校教育のカリキュラムと授業実践の可能性と課題について明らかにしたい。また、キー・ラーニング・コミュニティが用いている、多重知能理論以外の教育・心理学理論について、その特質と実践的活用の具体像を明らかにすることで、多重知能理論を中核とした総合的な学習のカリキュラムや授業実践のモデルを提案することも可能だと考えている。

注

- 1) ガードナー・H (松村暢隆訳) (2001)『多重知能：個性を生かす多重知能の理論』、新曜社、p.46
- 2) 松村暢隆 (2003)『アメリカの才能教育—多様な学習ニーズに応える特別支援』、東信堂、p.42
現在、多重知能の数や種類については、研究者によって定義や解釈が異なるため、本稿では松村(2003)の定義に統一して記した。なお、「⑧博物的知能」に関しては、「自然物に対する認識や情緒的な理解」という意味を加えて「自然的知能」といった訳語を用いることも可能であると考えている。また、「⑤空間的知能」から「⑧博物的知能」については、用語の説明が必要であると考えたため、以下にその解説を記す。
 - ⑤ 空間的知能 (Spatial Intelligence)
広い空間のパターンを認識して操作する、限定された範囲のパターンを認識して操作する等の能力を司る知能。高い空間的知能をもつ人の例として、前者はパイロット等、後者は彫刻家や建築家等が挙げられる。
 - ⑥ 対人的知能 (Interpersonal Intelligence)
他人の意図や動機付け、要求を理解して、円滑な人間関係を築く能力を司る知能。高い対人的知能をもつ人の例として、教師や臨床心理士、政治的指導者等が挙げられる。
 - ⑦ 内省的知能 (Intrapersonal Intelligence)
自分自身のパーソナリティを理解する、また、自分のパーソナリティに関する効果的な作業モデルをもち、その情報を自分の生活を統制するために効果的に活用することができる能力を司る知能。
 - ⑧ 博物的知能 (Naturalist Intelligence)
自然物に関する認識ができる、自然物や人工物の種類を識別することができる等の能力を司る知能。高い博物的知能をもつ人の例として、生物学者や環境保護家等が挙げられる。
- 3) アームストロング・T (吉田新一郎訳) (2002)『「マルチ能力」が育む子どもの生きる力』、小学館、pp.42-44

- 引用文は、基本的には上述した著作の記述に準じているが、8種類の多重知能の日本語訳を松村(2003)の定義に統一して記した。さらに、吉田は、“intelligence”・“intelligences”を「能力」と訳しているが、本稿では統一して「知能」と訳した。
- 4) 「II キー・ラーニング・コミュニティの設立とその背景」における記述は、Kunkel, C. (2009) “The World’s First Multiple Intelligences School : The Story of the Key Learning Community” の記述を参考にした。
 - 5) 橋爪貞雄 (1984) 『危機に立つ国家—日本教育への挑戦—』、p.32
 - 6) 同上書、p.33
 - 7) 大桃敏行(他)編 (2007) 『教育改革の国際比較』、ミネルヴァ書房、p.111
 - 8) 同上書、p.122
 - 9) 同上書、p.122
 - 10) Kunkel, C. (2009) “The World’s First Multiple Intelligences School : The Story of the Key Learning Community”, Chen, J. *et al* eds. *Multiple Intelligences around the World*, Jossey-Bass, p.292
 - 11) ガードナー・H (松村暢隆訳) (2001) 前掲書、p.39
 - 12) Kunkel, C. (2009) *op. cit.*, p.292
 - 13) *Ibid.*, p.292
 - 14) Campbell, L. (1999) “Key Learning Community in Indianapolis, Indiana”, Campbell, L. *et al* eds. *Multiple Intelligences and Student Achievement : Success Stories from Six Schools*, ASCD, p.53
 - 15) 内省的知能と対人的知能については、対応する具体的な教科が設定されているとはいえない。ただし、対人的知能に限っていえば、参観の様子から、授業中、多くのかかわり合いの場面が見られ、その育成を意図していることが推測される。しかし、現時点では、この2つの知能がカリキュラムにどう反映されているか明らかになっていないため、断言は避けた。
 - 16) Campbell, L. (1999) *op. cit.*, p.53
 - 17) 学校教育法施行規則別表第2 (第54条関係)によると、第1学年から第3学年までの、国語・外国語・社会・数学・理科の授業時数の合計が1565時間(1教科あたり平均313時間)であるのに対し、音楽・美術・保健体育の授業時数の合計は500時間(1教科あたり平均166時間)である。後者に対して前者の平均時数が2倍近くになることから、キー・ラーニング・コミュニティの時間割が、各教科をより対等に扱っていることが分かる。ただし、ここでは授業時数に関する量的な比較しか行っていないため、各授業の質的な要素に関する言及は避けた。
 - 18) 資料2で示した図は、キー・ラーニング・コミュニティのHP上 Key Learning Community, School 616、(<http://www.616.ips.k12.in.us/>)に記載されている「理論と実践」(Theory to Reality)の図を参考にした。
 - 19) Key Learning Community, School 616、(<http://www.616.ips.k12.in.us/>), 2010.10.11
 - 20) Key Learning Community, School 616、(<http://www.616.ips.k12.in.us/>), 2010.10.11

理論	多重知能理論 : ハワード・ガードナー	内在的なやる気理論 : M. テクスセントミハイ	人間の共通点理論 : アーネスト・ボイヤー	発達の連続体理論 : デイビッド・H・フェルドマン	学習の組織理論 : ピーター・センジ
理論の具体的な内容	<ul style="list-style-type: none"> ・内省的知能 ・音楽的知能 ・論理-数学的知能 ・博物的知能 ・空間的知能 ・身体-運動感覚的知能 ・対人的知能 ・内省的知能 	<ul style="list-style-type: none"> ・明確な目標 ・技能(skill)レベルに応じた挑戦 ・素早いフィードバック ・妨害される心配をすることなく、集中すること ・時間制限を設けないこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・ライフサイクルを共有する(Shared Life Cycle) ・記号の使用を共有する(Shared Use of Symbols) ・集団・組織の中での地位を共有する ・生産と消費の感覚を共有する ・自然との関係を共有する ・時間と空間の感覚を共有する ・価値と信念を共有する(Shared Values and Beliefs) ・美的な感覚を共有する(Shared Sense of the Aesthetics) <p style="text-align: center;">テーマに基づいた統合カリキュラム (ジェームス・B・マクドナルド) を組織するセンター</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・普遍的(Universal) ・文化的 ・規律に基づいた <ol style="list-style-type: none"> 1. 初心者 2. 見習い(徒弟) 3. 一人前の職人(journeyman) 4. 職人(Craftsman) 5. 熟練者 6. 親方(Master) ・特異性(Idiosyncratic) ・独自性(Unique) 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人的な熟達(Personal Mastery) ・精神的なモデル ・ビジョンの共有 ・集団での学習(Team Learning) ・システム思考(Systems Thinking)
	↓	↓	↓	↓	↓
	カリキュラムと指導	協力的な環境	キーコモナリティ(共通点)	真正のアセスメント (Authentic Assessment)	連続的な改善(向上)
実践	<ul style="list-style-type: none"> ・弾力的なスケジュール ・統合(integrated)カリキュラム ・チームワークと協力 ・真正の教授法(authentic pedagogy) ・最高の活動(culminating activity) 	<ul style="list-style-type: none"> ・複数年齢(multi-age)・複数能力(multi-ability)集団 ・高度な関心分野に開発されたプロジェクト ・「ポッド」クラスのために提供された選択肢 ・フロー活動ルーム ・生徒と職員が長所に焦点を当てる機会 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校の協定(契約)(School Compact) ・テーマに関連した週間計画 ・メンタープログラム ・徒弟プログラム ・サービスを行う機械 ・リーダーシップを発揮する機会 	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト ・プロジェクトのビデオ・マルチメディアポートフォリオ ・発達上のパフォーマンス記述(Developmental Performance Descriptor) ・理解のための指導 ・知能の諸領域に関するアセスメント 	<ul style="list-style-type: none"> ・協力的な仲間 ・専門性の発達 ・教師のポートフォリオ ・学校改善計画P.L.#221 ・北中部組合・委員会・認定
	2008 by the Key Learning Community				